

Asia Medical Massage Instructors Network

2008年9月AMINモンゴル視察 報告書

期間：平成 20 年 9 月 1 日～9 月 6 日

参加：形井秀一・藤井亮輔・竹内昌彦・楠山寛子

第2回モンゴル視察日程

9月2日(火)	
9:00～	モンゴル盲人協会
対応者:	バヤスガラン会長・ゲレル副会長・ガンゾリグ氏他
	学校建設予定地見学
	盲人協会とのミーティング
9月3日(水)	
10:00～	第116盲学校
対応者:	校長 ENKHTUYA 女史、NGO 団体 ZENAMAA 女史
12:00～	盲人トレーニングセンター
対応者:	ガンゾリグ氏、ツングヒ氏(コンピュータ講師)、ニャンフー女史(マッサージ講師) バイラ女史(英語・点字講師)
14:30～	モンゴル盲人協会
	盲人工場
対応者:	工場長
16:00～	保健省 (Ministry of Health)
対応者:	Director of Medical Services Management Division JAMBALJAV 氏、 Senior Officer チョロンバートル氏、BOLD 氏
17:30～	ベスト FM
対応者:	バヤスガラン会長、
19:00～	政府関係者との食事会
参加:	チョロンバートル氏、BOLD 氏、バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏
9月4日(木)	
11:00～	国立伝統医療大学
対応者:	校長
13:00～	MONOS(モンズ)私立伝統医療大学
対応者:	副校長
14:30～	国立第一病院東洋医学療法病棟
対応者:	Dr. Tsendsuren
9月5日(金)	
11:00～	社会福祉労働省 (Social Welfare and Labor)
対応者:	Population Development, Social Security, Policy and Coordination Department Tsend-Ayush 女史
12:00～	ベストマッサージ3号店
12:30～	盲人図書館
14:30～	ベストマッサージ4号店
15:30～	教育・文化・科学省 (Ministry of Education, culture and Science)
対応者:	Department of Higher and Vocational Education Senior Officer GANBOLD 氏 初等中等教育局専門職員 ミヤグマル女史
17:00～	盲人協会と視察を踏まえたミーティング

9月1日（月）

○事前打ち合わせ（空港にて）

参加：形井、藤井、竹内、楠山

BMIN より参加の竹内氏を交え、出発前に空港にて事前打ち合わせを行った。

<合意事項>

竹内氏が15年間、講演活動や出版物を通じて蓄えてきた資金を、モンゴル側の希望を確認した上で、マッサージ学校建設に役立ててもらいたいと考えていることが表明された。また、その学校建設および運営に関する支援はAMINの活動とし、竹内氏はスポンサーという位置づけで、AMINモンゴル資金（仮称）に寄付協力するという形をとることが確認された。

今回の視察の目的は、

- 1) 学校建設の具体的な計画を議論する
 - 2) 学校建設および運営に対する政府側の協力の確認
 - 3) モンゴル伝統医療の現状把握
- の大きく分けて3点とする。

- 1) 学校建設の具体的な計画の議論
 - ・計画がどの程度進んでいるか確認
 - ・どのくらいの規模の学校を考えているのか（年限、生徒数等）
 - ・建設資金や運営資金の見積もりについて
 - ・学校設立に関して考えられる政府からの支援
- 2) 学校建設および運営に関する政府協力の確認
 - ・モンゴルで学校建設する際の基準確認
 - ・モンゴル盲人協会の活動に日本側も協力する意思表示
 - ・AMIN・モンゴル盲人協会・政府の役割分担を確認
- 3) モンゴル伝統医療の現状把握
 - ・モンゴル伝統医療学校および治療現場の見学



9月2日（火）

○モンゴル盲人（視覚障害者）協会

対応者：会長 バヤスガラン会長・ゲレル副会長・ガンゾリグ氏（通訳）他

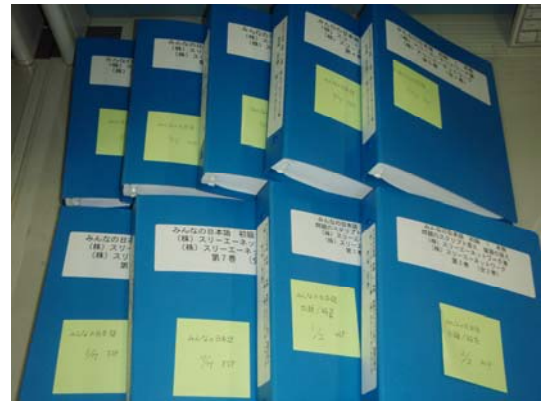
訪問者：形井秀一、藤井亮輔、竹内昌彦、楠山寛子

9時にモンゴル盲人協会を訪問した。場所はウランバートル市の中心街より南へ3～4kmの場所に



盲人協会入口（盲人工場）

あり、国営である盲人工場の建物内に部屋を借りて事務所を置いている。会長・副会長ともに前日ヨーロッパから帰国したばかりにも関わらず、訪問を歓迎してくれた。前回モンゴルに AMIN が訪問した際に、日本語の点字で書かれた日本語を勉強する教材がほしいとの要望があったため、今回みんなの日本語の日本語点訳版を贈呈した。



みんなの日本語点字版

本年 3～4 月に AMIN が訪問し、その後 7 月に日本盲人協会が訪問、今回は 3 度目の訪問となったが、その間「視覚障害者のためのマッサージ教育施設を建設する」ということに関する意見交換を行ってきており、学校を建設するという方向で進めていくことが再確認された。前回 7 月に日本盲人協会笹川会長が訪問した時点では、土地が確保されたことと、設計の準備をこれから進めるという話であったが、現在は設計士を探している最中とのこと。盲人協会が確保したという土地は、盲人工場の裏手にあり、ウランバートル市所有の土地である。一時期、市が一般企業に譲渡し 9 階建てのマンションを建設するという話も持ち上がったが、盲人協会が反対し、盲人のために何か役立てる土地にするという確約が市側となされた。学校を建設するにあたり、市内などに住む学生のアクセスは良いのかという質問もされたが、ウランバートルにいる盲人の中心地のようになっているので問題ないとの回答であった。

具体的にどのような学校にするのかということについては、日本の盲学校理療科を手本とし、高卒後 3 年から 4 年程度の学校にしたい、またその学校は政府からの認可の下りた正式な学校としたいとの考えが盲人協会から示された。3 年は長すぎるのではないかと、との意見もあったが、モンゴルでは看護師や理学療法士などの免許を獲得するのに高卒で 3 年から 4 年の勉強が必要という現状の中で、医療レベルとして認められるためには同程度の年数の教育が必要と考えているという理由が述べられた。また、生徒数は 1 学年 10 名程度で、3 学年で 30 名程度、地方からも入学できるように寮も併せて用意する必要がある。全国に視覚障害者は 4 万 1 千人、そのうち全盲者が 8 千人いるということであった。日本側よりその中で高卒者が何名ほどいるのか、毎年 10 名程度確保することが出来るのかなどの疑問があげられた。国内に唯一ある第 116 盲学校の高校 3 年生は毎年 7 名～9 名で卒後の進路は約半分が大学へ進学、残り半分は無職という状態になるという。盲人協会としてはその高卒者のうち 5 割程度入学するとして、あと 5 割は地方からと考えれば十分需要はあると考えている、という返答であった。

また、マッサージを学んだとして、卒後の仕事に対する需要はあるのかということに対しては、現在盲人協会が所有するベストマッサージが全部で 4 店舗（1 号店は 2 階建てにするために改装中、3 号店は新規オープンのため内装工事中）



右からガンゾリグ氏・ゲレル女史・
バヤスガラン氏

あり、また、ホテル・病院・観光地などからマッサージ師はいないかとの問い合わせがある。地方でも、温泉治療院などからの要望があり、職についても需要はあると協会は考えている。

一方、指導者の確保については今後の課題である。現在6カ月間の講習会を日本の3療免許所有のガンゾリグ氏と沖縄プロジェクト終了者の2人の計3名が講師として行っているが、10月よりそのうちの一人（ニャンフー女史）が、国際視覚障害者援護協会の支援で、留学生として日本の盲学校

へ留学することになり、今後しばらくは2人態勢になる。学校を設立するとすれば、モンゴルの医科大学などに講師をお願いするなども考えなくてはならない。長期的な展望としては、日本の支援として、毎年1～2人ずつ、援護協会と協力しながら計画的に教員になりうる学生を日本へ留学させることが考えられる。

資金面については、建物・設備・運営などに資金が必要であるが、盲人協会としては大体50万ドル程度かかると考えている。根拠としては、現在ベストマッサージ1号店（盲人工場敷地内）を1階建てから2階建てにする工事に12万ドルで少し足りないくらいかかっている。このベストマッサージにはすでに水道等は整備してあるが、教育施設は新たに建物を建設することに加えて水道等の整備も必要で、建物の建設費で35万ドル、プラス設備費に15万ドルくらいと見積もっている。この点に関しては、今後実際に教室数などを考え、日本側（竹内氏）・モンゴル側（盲人協会）の双方が原案を作り、検討していくこととなった。また、国の認める基準に沿ってカリキュラム・教員などについて詳細を検討する必要があるので、それをモンゴル盲人協会が調べることになった。現在トレーニングセンターの光熱費や教員の給料など、運営にかかわる費用は国から支出されている。今回の学校についても、モンゴル政府・盲人協会・日本とそれぞれの役割分担が必要だということが確認された。

現在マッサージ師単独の国家資格は存在せず、モンゴル伝統医師（高卒6年課程＋2年研修）が、漢方薬、鍼、マッサージ、運動療法などを行うことができる。（後日の病院見学で看護師が医師の指導の下マッサージをすることが多いように見えた）

日本側としては、3年～4年課程の学校というのは、予想より大規模なもので、それに伴い、必要と思われる資金も予想より額が大きいため、資金集めに関しては日本とモンゴルでお互いが努力することを確認した。

○学校建設予定地

盲人工場から道路1本隔てた行員宿舎裏手にある目測400㎡ぐらいの市有地。1学年10名程度3学年のカリキュラムとすると、教室3つ、実技室3つ、事務・職員室・寄宿舍も併設した建物を作るとなると3階建てぐらいの建物が必要となるであろうとの事。



学校建設予定地

○盲人協会とのミーティング

食事をはさみ、藤井・竹内両氏がいる間ということで改めて盲人協会との意見交換を行った。

やはり一番の問題は資金集めをどうするかということである。バヤスガラン会長より、2009年2月まで現在の3年～4年制の方向で資金集めやカリキュラム作りをし、その時点で目途がたたなければ、規模を縮小し、1年もしくは2年程度の学校をまず作り、その後大きくする努力を続けるというのはどうか、という提案がなされたが、このことについては副会長とガンゾリグ氏がともにせっかく作るのであれば、現在行っている6ヶ月の講習の延長のようなものではなく、医療として国にも認められるような学校を作ったほうが良いとの意見がだされ、最終的に日本・モンゴルともに最低3年ということでも今後進めていくことが確認された。

まずは10月中に建物・設備・運営面の計画と予算をモンゴル盲人協会側で立て、それを元に役割分担とAMINに望むことを文章にして出すことが望ましい。また、竹内氏も独自にプランを考えモンゴル側の計画と照らし合わせてみることにする。モンゴル政府の中には、どういう学校になるのか、視覚障害者の職業自立についてどのようにしたらよいか理解できる人間は少ないので、日本へ来てもらい直接日本のシステムなどを紹介する機会についても検討することが話し合われた。

9月3日（水）

○第116学校

対応者：校長 インヘツヤ女史、ZENZMAA女史

訪問者：形井秀一、楠山寛子（通訳：ガンゾリグ氏）

10時よりモンゴル国内唯一の盲学校である第116学校を視察した。今年度（9月が年度初め）より国の教育制度が変わり、11年制から6・3・3の12年制に変わり、昨年までは8歳入学であったが今年から6歳入学となった。現在

は高校までだが、その後の職業教育にも今後力を入れていきたい。現在は音楽を専門的に教えている。今後はマッサージやコンピュータの教育もしていきたいと考えており、日本の盲学校などと姉妹校提携のようなことが出来ないかと考えている。また、卒業生から日本の大学へ行き学ぶ機会を作ることができないか、ということだったので、技大の紹介、入試方法、奨学金制度に関して紹介した。機会があれば日本へ行き、日本の教育現場を見学したいとの希望が伝えられた。

また、元盲聾学校（現在の学校と聾学校が2004年に分離する以前の学校）で28年間教員を務めていたZENZMAA女史も居合わせ、話をする事ができた。現在は退職し盲聾の子供たちを支援するNGO団体を運営しており、教育や医療、野菜の作り方を教えるなどの活動をしている。資金的な問題は常にあるので、どこか活動を支援してくれるところがあれば教えてほしいとのことであった。

実際の学校見学では小学校3年生クラスの授業見学、コンピュータ室、職員室、寄宿舍、図書館などを見学し、米粒や紐などを使用した教員手作りの教材なども見ることが出来た。コンピュータ室のコンピュータなど、韓国のKOICAという財団からの寄付をもらっているようだった。現在点字教科書については、ボランティアに近いような人が学校より少しだけ給料をもらい、点字のものを作成しており、生徒に十分いきわたる程度確保できている。ただし、寄宿舍には本棚のようなものはなく、部屋の中は閑散としていたのが印象的であった。図書室勤務の女性はガンゾリグ氏の同級生で、9月より訓練センターでマッサージ講習を受けている方であった。その他は第1回視察報告でもされているので省略する。

○視覚障害者訓練センター

対応者：ガンゾリグ氏、ニャンフー女史、ツングヒ氏

訪問者：形井秀一、楠山寛子

第116学校見学後、その建物の裏にある訓練センターを見学した。現在はコンピュータ、マッサージ、英語、点字、歩行訓練などの講習を行っている。職員



第116盲学校



寄宿舍

は講師4名と事務1名、運営費は国から支払われている。

コンピュータ講習は9月より新しく始まった。内容は直接職業につながるものというよりは、パソコンの入門を教えている。講師はツングヒ氏で、コンピュータと英語は独学で勉強したという。モンゴル語の音声ソフトはまだ開発されていないため、英語の音声ソフトを使用しているの、生徒もコンピュータ操作に必要な英語はわかるという話だった。

パソコンそのものはトルコの教育基金より捻出され、生徒の方々は6畳ほどの小さな部屋に詰め詰めで座り熱心に6台のパソコンを操作していた。

マッサージ講習は現在ガンゾリグ氏、ニャンフー女氏ともう一人沖縄プロジェクトを終了した男性の3名で教えている。沖縄プロジェクトから帰国後2005年より講習を行っている。9月からの生徒は10名で、見学したときは6名の生徒が互いに実技を行っていた。週5日、1日6時間（金曜日のみ5時間）の講習を6か月間行う。教科書は日本の盲学校のものをガンゾリグ氏がモンゴル語訳したものを使用しているという事であった。カリキュラムについてはモンゴル語しかないため、英訳したものを後日郵送してもらうことになった。



コンピュータ講習会

○モンゴル盲人協会および盲人工場内見学

対応者：工場長他

訪問者：形井秀一、楠山寛子

協会職員は現在5名とカナダからのボランティア1名で運営している。盲人協会が会長を初め現在のメンバーになったのは2001年、それから2003年までインターネットなどで世界の盲人協会とはどのようなものかを調べ、その調査結果を踏まえて2004年くらいから本格的な活動を始めたという。点字図書館を始めたのも2004年だった。点字図書館の図書なども盲人協会内で作っており、盲人協会職員とは別に6名の点字図書の作成に当たっている。（雇用形態については不明）

盲人工場は国営ということで、工場員は公務員ということになるという。8月中は夏休みで工場が休みだったということで、工場の稼働もこれからという様子であった。現在はゲル、ほうき、フェルト製品などを作っているようだが、今後は紙袋や、封筒など国で使用する紙製品を同工場で作れるようにという計画があるという。



盲人工場作業場

その他については第1回視察報告書に記載してあるので省略する。

○保健省 (Ministry of Health)

対応者：Director of Medical Services Management Division JAMBALJAV 氏、
チョロンバートル氏、Bold 氏

訪問者：形井秀一、楠山寛子、バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏

午後4時より保健省へ訪問した。そこではDirectorのJAMBALJAV氏、前回4月の視察団も面談したチョロンバートル氏、モンゴル伝統医療医師で、4月より新しく保健省に赴任したBold氏の3名の政府関係者と意見交換を行った。

まずはバヤスガラン会長よりAMINについての簡単な説明があり、視覚障害者のためのマッサージ学校建設を考えていることが伝えられた後、形井教授より筑波技術大学、AMINの活動内容、日本の視覚障害者と鍼灸マッサージの歴史などについて紹介された。そして、AMINとしてはモンゴル盲人協会の活動に協力する意思があることを伝え、学校建設や運営に関しても、日本の300年の歴史を踏まえ協力していきたい旨が伝えられた。

それに対しJAMBALJAV氏より、モンゴルには現在人口250万人、そのうち60万人が障害者である。それぞれが出来ることで職業自立するべきであること、視覚障害者の中には感覚がするどい人も多いのであろうということ、法律にのっとって学校を作ることにに関して応援するので今後連絡を取り合いながら協力していきましょうなどということが話された。

また、日本の資格制度を例に挙げ、モンゴルでの資格化について伺った。モンゴルにはマッサージの資格というものはなく、モンゴル伝統医療の医師が鍼・マッサージ・漢方・運動療法などを使い治療することが許されている。現在は視覚障害者に対して門戸は開かれておらず、理由としては教材の問題と視覚障害者に対して医療を教育するという事が出来る教育者がいないことが挙げられた。実際にガンゾリグ氏も日本からモンゴルに帰国したのち、モンゴル国内でも鍼灸マッサージの治療ができるように保健省に要請したが、実際にはマッサージだけが許された。また医療マッサージとは何か、ストリートマッサージとはどのような違いがあるのか、日本式あん摩の学校を作るということだが、それはどのようなものか、マッサージだけで治療することができるのか、視覚障害者が鍼で治療することが想像できないなど、厳しい意見も出された。個人的な感想としては、まずは日本で実際に視覚障害者がどのように教育され、治療者となっているという姿を見てもらう必要性を強く感じた。

○ベスト FM

対応者：バヤスガラン会長、ソロンゴ女史、アザー女史

訪問者：形井秀一、楠山寛子

17時30分より盲人協会運営のFMラジオ局を訪問した。今年7月に起きた

現政権に対する市民の暴動が起き、ベストFMが入っていたビルが政党の建物のすぐ前に位置していたため、ビルが火災にあった。しばらく休業した後、現在のビルに転居し放送を再開したばかりだということである。将来の目標は盲人のための時間を増やすことと、全国ネットにすること。

その他詳細に関しては前回報告書に記載されている通り。



現ベスト FM 入居ビル

○政府関係者を交えての夕食会

保健省：チョロンバートル氏、BOLD 氏

盲人協会：バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏

AMIN：形井、楠山

7時より当日面会した医療省からチョロンバートル氏・BOLD 氏を招き夕食会を行った。ここでは公式な面会ではなく、非公式な意見交換ということで、交流を深めつつ本音で話すことができたようである。(途中モンゴル語での白熱した議論がなされていた)

マッサージの学校を作るということそのものについては二人とも理解を示しているが、それを国に認められた正式な学校とするのであれば、日本あん摩がより優れていると主張し対立するのではなく、モンゴル伝統医療とうまく組み合わせてお互い良い面を取り入れあい、医療制度・関係者にも理解してもらうことが大事だということ、また、その方向に向かいお互い協力しあうことが確認された。

9月4日(木)

○保健省

対応者：チョロンバートル氏、BOLD 氏

訪問者：形井秀一、楠山寛子、ガンゾリグ氏

10時より再び保健省を訪れた。保健省では病気の予防に関する番組を作成しているようで、ビデオカメラで撮影しながらの会談であった。BOLD 氏はモンゴル東洋医学会の会長で、予防医学についても研究している。前日の意見交換を通じて、モンゴル盲人協会の活動に理解を示し、改めて学校建設についても前向きに進めていくことを確認しあうことができた。

○国立伝統医療大学 (School Of Traditional Medicine)

対応者：学部長 Ass. Prof. S. OLDOKH. 氏

訪問者：形井秀一、楠山寛子、BOLD 氏、ガンゾリグ氏

保健省の BOLD 氏に同行してもらい、モンゴル伝統医療の学校および臨床施設を視察した。まず 1 件目は唯一国立の伝統医療大学で、1989年に設立され、教育施設、臨床施設、研究施設がある。

2 年前にバヤスガラン会長よりこの大学に視覚障害者も入学できるようにできないかとの相談があったが、教科書の問題や教員のノウハウの問題で実現できていない。現在モンゴルの障害者に対する政策としては、生活保障が中心で今後は職業自立について力を入れていかななくてはならないだろう、そういう意味で東洋医学は西洋医学に比べて視覚障害者に向いているなど、一定の理解を示した。また、新たに視覚障害者のための学校を作る計画について説明されると、教員の派遣など協力できることを今後一緒に検討するという事でまとまった。

学部長との面会后、教育施設の見学をした。生徒数は 1 学年 50～60 名で約 300 人、教員は 15 名いる。設立当初は教員が不足していたため、内モンゴルなどから教員を呼んでいたが、現在は卒業生の中から徐々に教員となる人材が育ってきたという。この大学はモンゴル国立医科大学(Health Sciences University of Mongolia)の一学部となっているが、学生は入学時から東洋医学か西洋医学か選択する。カリキュラム内容は 35%が西洋医学分野、65%が東洋医学分野となっており、その中で漢方・鍼・マッサージ・運動療法なども学ぶ。ただし、6 年間の課程を修了後、2 年間専門分野について西洋医学を学べば、西洋医になることも可能とのことであった。学生の中にはブータン・ロシア・中国・韓国などからの留学生も含まれている。

臨床施設では実際に鍼や吸角（瀉血）、マッサージなどで治療している患者さんを何名か見せてもらった。鍼は太めで鍼管や押手なしで刺入するという。鍼は韓国製のものを使用していた。またモンゴル伝統医療のマッサージは主にオイルやミルクを使うようで、その際治療を受けていた患者さんは、看護師 4 人がかりで手拭いのようなものを使い全身マッサージされていた。現在入院している患者は 100 名程度で、金額による部屋の設備の違いもあるようである。また、昼食には実際に食べられている病院食（その日の献立はツオイビーという羊肉を使ったやきそばのようなもの）をいただいた。東洋医学の臨床施設ではあるが、西洋薬や XP、CT などの検査器具も使用しながら治療することが可能であるとのことである。その他、温泉治療や物理療法、チベット仏教のお祈りする部屋などが見られた。研究施設では主に漢方について研究して



形井教授学部長と



モンゴル伝統医療式マッサージ

いた。

○私立伝統医療大学 MONOS（モンス）

対応者：副校長

訪問者：形井秀一、楠山寛子、BOLD 氏、ガンゾリグ氏

午後 1 時より私立の伝統医療大学を訪問した。伝統医療の大学は現在国立大学 1 校と私立大学 2 校あり、そのうちのひとつである。MONOS（モンス）という製薬会社が 2000 年に設立した新しい大学で、伝統医療医師課程 6 年間、薬剤師 5 年間および薬剤師補助 3 年間の課程がある。全部で 850 名の学生と 50 名の教員がいる。また修士課程には 30 名、博士課程は 2 名の学生が在籍する。3 つの伝統医療大学では約 70% については共通の内容を学ぶが、残り 30% はそれぞれの大学によって特徴がある。（モンゴルでは特徴があることが学校設立時に求められるそう）国立大学は鍼灸やリハビリなどに力を入れており、このモンスは親会社が製薬会社だけに薬学に力を入れている。またもうひとつの大学はチベット仏教を多く取り入れているという特徴がある。



MONOS 外観

中には伝統医学のちょっとした博物館があり、モンゴル伝統医療についての歴史や考え方などが展示されている。

○国立第一病院伝統医学療法病棟

対応者：Dr. D. TSENDSUREN（女性）

訪問者：形井秀一、楠山寛子、BOLD 氏、ガンゾリグ氏

ウランバートル市街地へ戻り、14 時半頃から保健省のちょうど裏にある国立第一病院を訪問した。午後の訪問であったため患者さんは少なく、午前中の診療が終わってスタッフがちょうど一息ついているところであった。鍼で治療する患者数は 1 日 50～60 人程度で、3 人の医師で対応している。1 人にかかる治療時間は約 20 分程度で、パルスでの治療も 10 名程度いる。パルスは日本製のものを使っているとのこと。モンゴル伝統医療の医師としての養成が始まったのは 20 年前で病院内での治療の歴史も浅いが、鍼だけは 1958 年より行っている。



伝統医学療法病棟

9 月 5 日（金）

○社会福祉労働省 (Ministry of Social Welfare and Labor of Mongolia)

対応者：Director of Population Development, Social Security,

Policy and Coordination Department Tsend-Ayush 女史

訪問者：形井秀一、楠山寛子、バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏

11時より社会福祉労働省を訪問した。まずはバヤスガラン会長より、AMINの活動などについての簡単な説明と、今回盲人協会として学校を新たに作りたいと考え、日本からも協力する意思があることを伝えた。その後形井教授が自己紹介と大学、日本の視覚障害者に対する制度、AMINの活動、日本あん摩とモンゴル伝統医療で使われるマッサージの違いについても紹介した。

Tsend-Ayush 女史からは、社会福祉労働省としては、これまでもモンゴル盲人協会に対してトレーニングセンターの運営費や今回新しく OPEN するベストマッサージ3号店の建設費など、さまざまな面で一緒に仕事をしてきている。また、今年1月に社会福祉法が変わり、モンゴル盲人協会からの意見を取り入れている。また、政府間協定である沖縄プロジェクトに関しても協力してきた。以前日本で社会福祉の勉強をした経験があり、視覚障害者のマッサージ施術も受けたことがあることから、視覚障害者が優れたマッサージ技術を持つことができるということについても理解している、などと述べられた。

さらに女史からは、日本のマッサージ師は医学的なことも学ばなくてはならないと聞いているが、今回新たに作る学校はどのようなものにするのか、大学となると難しいのでリラクゼーションマッサージの学校にするのはどうかという質問がされた。それに対してバヤスガラン会長は、日本の高卒3年というものをモデルにすることができるということと、あくまで医療としてのマッサージを目指す考えを示した。

また、学校建設に関して AMIN からは具体的にどのような支援が期待できるのかという質問に対して形井教授からは、カリキュラム・教員・資金面も含めての支援を考えているが、具体的な支援内容に関しては、どのような学校にするかという盲人協会の原案が出来てから、盲人協会・政府・AMIN としてそれぞれどのような役割を果たすことができるか話し合っていきたいということが述べられ、今後、連絡・協力し合うことが確認された。

○ベストマッサージセンター3号店(内装工事中)

対応者：バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏

訪問者：形井秀一、楠山寛子

社会福祉労働省を訪問後、同省からの支援を受け設立される、ベストマッサージセンター3号店を視察した。9月5日(訪問当日)のオープンを目指し内装工事を行っていたが、間に合わず、次週にはオープンする予定ということであった。施



マッサージブース

設には3ブースの仕切られた空間と、シャワー室・トイレというこじんまりとしたものであったが、清潔感があり好感の持てるものであった。6名のマッサージ師（いずれも視覚障害者でトレーニングセンターでの講習修了者）が働く予定となっている。（10時～16時・16時～22時の2シフト制）社会福祉労働省からの支援金は、不動産購入代金分程度で、内装分は盲人協会から捻出されている。

○点字図書館

対応者：図書館司書の女性、バヤスガラン会長

訪問者：形井秀一、楠山寛子

12時半くらいより、点字図書館を視察した。ウランバートル市立の一般の図書館も入っているビル内に2004年に設置されたものである。現在はCD7～800枚、点字図書4～500冊という規模で、司書は弱視の女性で、ウランバートル市の職員という位置づけになるという。以前は音楽の教員をしていたようで、ガンゾリグ氏の同級生ということであった。点字図書館内にはコンピュータはあるがインターネットとは接続されていない。訪問時は利用者が2名おり、二人ともCDを聴いていた。

その他は前回の報告書にもあるので省略する。



点字図書館

○ベストマッサージセンター4号店

対応者：バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏他

訪問者：形井秀一、楠山寛子

昼食後、日本大使館のすぐそばにあるベストマッサージセンター4号店を訪問した。こちらも最近オープンしたばかりで、場所は賃貸、資金は全額モンゴル盲人協会から捻出されているということで、3号店より早くオープンできたという。3号店と比べると内部も広く、地下にはプールやサウナなどの施設も完備しているが、ベッド数自体は3台で、施術者も3名でこちらもトレーニングセンターのマッサージ講習修了生だという。その他晴眼者のスタッフも何名かいるようだ。ここでは10分程度実際にマッサージ施術を受けることができた。15分3000Tg（約300円）、60分で12000Tg（約1200円）という料金設定。



受付ロビー



ベッド3台

○教育・文化・科学省 (Ministry of Education, Culture and Science)

対応者：Senior officer of Department of Higher and Vocational Education

GANBOLD 氏、初等中等教育局専門職員 ミヤグマル女史

訪問者：形井秀一、楠山寛子、バヤスガラン会長、ガンゾリグ氏（通訳）

15時30分より今回最後の訪問先である教育・文化・科学省を訪問した。初めにバヤスガラン会長より学校建設を目指していることなど簡単に説明があった後、形井教授より大学・AMIN の紹介、日本の障害者教育や医療制度の紹介をし、モンゴルの医療システムの中で認められる学校の設置を目指すというモンゴル盲人協会の活動を、AMIN としてできる限り応援していきたいという意思が伝えられた。また、日本あん摩とモンゴル伝統医療でされているマッサージの違いについても示された。

その後、GANBOLD 氏より学校の教育内容、規模、教育対象者についての質問がなされた。それに対しバヤスガラン会長は、3～4年課程で、医療的なことも含めた教育を高卒の視覚障害者に対して行う。カリキュラムなどに関しては日本を手本に、1学年10名程度で地方からも入学できるように寄宿舎も必要と考えている、と述べた。GANBOLD 氏は、学校を新設するために必要なのはまずは需要である。高卒の視覚障害者はそれほど多くないのではないかと懸念もあるが、現在医師大学は国内に11校あり、これ以上必要ないので、そういう意味では医師を補助するようなマッサージ師などは今後必要になってくると思うし、良い観点だと思う。看護大学の中で日本マッサージを教えるというのはどうか？そのほうが政府としては応援しやすい、という提案がされた。それに対しバヤスガラン氏は、モンゴル盲人協会としては、視覚障害者のための学校を設立したいという考えを改めて示し、それを補足する形として、形井教授より、障害者の教育としては統合教育と個別に教育する方法があると思うが、特に職業教育に関しては個別にそれぞれの資質を生かす形での教育を行うことが望ましいのではないかと意見が出された。

その他必要なもの、資金・カリキュラム・指導者などについてはどのようにするかということに関しては、まずモンゴル盲人協会が原案を作り、それを正式に文章にして政府へ提出し、それに基づき、盲人協会・政府・AMIN の役割をそれぞれ検討することが確認された。また、短大・大学・専門学校などの学校の位置づけはカリキュラムなどを検討の上、モンゴルの法律上どの位置になるのかを教育省で検討してもらうこととする。また、学校建設のための要項・フォーマットがデータで手渡されたが、モンゴル語ということで AMIN には後日必要な部分だ



会議室にて

け英訳したものを送ってもらうことになった。

○モンゴル盲人協会

対応者：バヤスガラン会長、ゲレル副会長、ガンゾリグ氏（通訳）

訪問者：形井秀一、楠山寛子、

16時30分よりモンゴル盲人協会にて、今回の視察の成果と今後の課題、視察結果を踏まえた上で今後の協力体制についての話し合いを行った。

まず盲人協会より、モンゴルの感想・アドバイスなどはないかとの問いかけがあり、形井教授より次のようなことが述べられた。今回は大きく、政府関係、教育関係、盲人協会の活動の様子について視察することができた。特に政府関係については、主に学校建設について話し合ったが、感触としては良かったのではないと思う。ただし、まだまだ理解が足りないところもあると思うので、ぜひ日本へ招き直接現状などを見てもらうことが必要だと感じた。教育に関しては、医療教育のレベルは高いと思う。伝統医療もまだ20年の歴史ではあるが、若いリーダーの下今後発展してくだらうと感じた。今後マッサージ学校を作るにあたり、伝統医療の人達にもうまく協力してもらいながら進めてもらいたい。また、モンゴル盲人協会の活動についてはFM局を持つなどの発想や、マッサージセンターも清潔で感じが良い。カルテを作るなど顧客管理を行えばもっとよいのではないか。

盲人協会からは、モンゴル政府の中でマッサージを理解している人が少ないので、4月、9月と日本からの訪問で、考える良いきっかけにはなっていると思う。国内の視覚障害者のためにこれからも言うべきことは強く訴えていきたいとおもっている、と述べられた。

具体的な今後のスケジュールについて

- ・盲人協会が10月中にどのような学校にするのか書類にまとめ、政府に提出
- ・11月初旬～中旬くらいに政府関係者を中心に日本へ来てもらい、日本の政府関係者、教育施設、視覚障害者関連施設などを紹介する。

以上

